

ここはボツコニア

朝、目が覚めたら――

ピノの枕元に、赤いゴム長靴があった。

その朝は普通の朝だったけれど、普通の日の始まりではなかった。何となればピノの十二歳の誕生日だからである。そして十二歳の誕生日の朝、ベッドの枕元にゴム長靴を発見するというのは、彼が暮らすこのモルブディア王国のなかでは、ちょっとした意味のあることなのだ。

ピノは腹ばいになり、枕の上に肘をついて顎を載せて、しばらくのあいだ赤いゴム長靴を見つめた。しげしげと見つめた。

そして二度寝しました。気持ちいいですよ、二度寝。作者もよくやります。

「ピノ！」

結局、母さんに叩き起こされることになったピノである。

「枕元に何があるかわかっているの？」

「わかってるよ」

ピノは眠たがり屋なので、母さんにベッドから引きずり出されてもまだ枕を離さない。

「これが何だかわかかって、どうしてグズグズ寝てられるのかしら？」

「だって、めんどくさいじゃんか」

ピノの母さんという人は、別に女手ひとつで苦労してピノを育てているわけではない。夫つまり

ピノの父さんは魔法石送電所フネ村支部の技師として働いていて結構な高給取りで、だからピノの母さんは楽をしようと思えばいくらでも楽できる立場にいるのだけれど、なぜか働き者なのだ。

面倒くさいなどという言葉は、大嫌いな女性なのだ。

「あんた、ね」

枕ごとピノを吊り上げると、鼻と鼻がくっつきそうなくらいに顔を近づけて、母さんは凄んだ。

「どつと顔を洗って支度なさい。九時までには役場へ行かなくちゃならないの。これは国民の義務なの。わかる？ あたしたちのこの国の未来がかかっている大事なことのよ」

ピノにはそんな実感はなかった。ただ、別の〈大事なこと〉を思い出した。役場へ呼び出されたときは、学校をサボっていいのだということ。

――ま、いいか。

というくらいこの少年が、本編の主人公である。

モルブディア王国は、ロワラン西大陸の東南東の端っこに位置する、人口三百万人ほどの小さな国だ。

主な産業は農業と牧畜業。但し魔法石の力で国土の隅々まで電力が行き届いているので、基本的にはエコでクリーンなエネルギーに支えられた先進国であると言ってよらしい。

もつとも、先ほどから説明抜きで使用されているこの〈魔法石〉というものは、地上のものではない。この世界をつくった創世神からの賜り物で、だから人間には、その組成も、それがなぜ無限

のエネルギーを生むことができるのかという仕組みも、未だによくわからないままだ。いや、本気で研究すれば突き止められるのだろうけれど、そのためには魔法石を研究材料として使用せねばならず、そうするとその分だけ魔法石を消費してしまうことになるので、モルブディア王国だけではなくロフラン西大陸全体で、解析や研究が厳しく禁じられているのだった。

そう、無限のクリーン・エネルギーを生み出す魔法石は、それ自体は無限のものではなく、使用されると質量が減るのである。これまでの永い年月のあいだに、ちよつとずつ小さくなっているのだった。モルブディア王国では、だいたい百年で七十五グラムという半端な割合で減っている。

遠い昔、千年ぐらい前には、ロフラン西大陸全体で、この魔法石をめぐって大戦争が起こった。そのころには魔法石は百キログラムばかりの大きなひとつの塊で、一方西大陸には王家や共同体や武装勢力や宗教団体が数え切れないほどたくさん存在していたので、当然のようにとりつこが始まったのだ。

戦争はざつと三十年も続いた。魔法石はそれ自体に意志（らしきもの）を持っているらしく、転々と居場所を変える。だから、ある勢力が魔法石の埋まっている土地を占領すれば戦争が終わる——というふうに、簡単には片がつかなかったのだ。

意志を持ち自力で移動するという特質に着目すれば、魔法石は（見かけは石に見えるけれど）鉱物ではなく、生物なのではないかとも思える。とはいえ移動手段は不明で、細長くなって地中をずるずるミミズみたいに掘り進むのだという説もあれば、テレポートするのだという説もある。後者だとすれば生物らしくないふるまいだけれど、誰も確かめたことがないから何とも言えない。

さてこの魔法石獲得戦争は、終わるときには呆気なく終わった。魔法石そのものが勝手に七つに分かれて、七つの団体（繰り返しますが王家とか共同体とか武装勢力とか宗教団体とか）のところに現れたからだ。正確にいうならば、七つの団体のトップの城や基地や教会のそばに、魔法石が空から隕石みたいにどかんと降ってきたのだった。

結果、その七つの場所に七つの国ができることになった。王国もあれば宗教国家もあれば共和国もある。勝手に分かれた七つの魔法石の大きさはとりどりで、最大のもは四十五キロあり、最小のもは六キロ足らずだった。ちなみにその最小のもがモルブディア王国の魔法石である。

何かこう、地上の人間たちの際限ない争いに嫌気がさした神様が、えいやつとばかりに適当に魔法石を分けてしまったという感じがしないでもない。それでもまあ、世は治まるように治まった。巨きな魔法石が降ってきたところは周囲の敵対勢力まで吸収合併して大きな国になり、小さな魔法石が降ってきたところもそれなりのちんまりとした国になったわけだ。

興味深いことに、ひとたび七つに分かれた魔法石は、これまでのところ二度とひとつに戻ろうとしないし、それ以上の数に分かれる気配もない。さらにこの七つの国のどこかが邪心を起こし、隣国に攻め入ってその魔法石をぶんどろうと試みると、侵略軍の先遣隊が国境線を越えるや否や、自国の魔法石がアラ不思議、雲を霞と消えてしまうのである。天に昇ったか地に隠れたか、はたまやっぱりテレポートしているのか、どこかに姿を隠してしまうのである。

これではどうしようもない。軍隊はしおしおと引き揚げる。すると魔法石もカムバックする。何度繰り返しても同じことが起こる。

だからロフラン西大陸では、魔法石の七分割と七つの興国以来、一国内の政変や内乱は起こっても、国同士の戦争はない。一切ない。モルブディア王国では国内紛争さえ起こっていないので、平和そのものだ。有り難いことである。

但し、問題がないわけではない。

魔法石が、エネルギーを生みながら減っているからだ。国によって、もともとの魔法石の大きさによって、その国のエネルギー消費の具合によって、減り方に違いはあるものの、どこでも減っていることは確かだ。そうそう、あんまり内乱や政変ばかりやっていると大きく減る。

いつかは、どの国でも魔法石が尽きる。

するとどうなる？ エコでクリーンなエネルギーが尽きた七つの国は、先史時代に逆戻りだ。それは困る。ではどうするか？

①魔法石が尽きる前に代替エネルギー源を開発する。

②どうにかしてもういつペン神様に面会して交渉し、新しい魔法石をもらう。

モルブディア王国は、②の道を選んだ。そして、十二歳の誕生日を迎えた子供の枕元にゴム長靴が現れる——というしよぼい〈奇跡〉は、この②の選択肢と深い関わりを持っているのであった。

というところが、この物語のスタート時点でのおおまかな設定であります。

ん？ ロフラン西大陸の外はどうなってるのかって？ ほかの陸地はないのかって？

あることはあるのですが、今はまだ気にしないでください。

とりあえず、まわりは海です。

\*

少年ピノが両親と暮らしているフネ村は、モルブディア王国の端っこにある、盆地のなかの小さな村である。役場も村の規模にふさわしく木造の二階建てで、てっぺんに小さな時計塔を頂いている。その時計の針が午前九時ちょうどを指すまでに、ピノは何とか間に合った。

役場のホールは閑散としていた。ピノは総合受付に近寄って、カウンターの向こうに座っている若い女性事務員に声をかけた。

「あのお」

丸眼鏡の女性事務員は、ちらりとピノの顔を見ただけで、すぐ言った。「あらピノ、もしかして長靴が出てきたの？ そっか、今日は誕生日なんだね」

もったいぶって〈女性事務員〉なんて書いたけれど、フネ村はこぢんまりした自治体なので、村人はみんな知り合いなのだ。彼女の名前は——

(N) P C の名前は自由につけることができます。デフォルトを選ぶ場合はカーソルをへけっ

ていゝに合わせて〇を押ししてください)

彼女の名前はエリンという。エリンはカウンター越しに受付票を差し出すと、

「それ持って、二階の鑑定課へ行つてね。長靴は持ってきたでしょ？」

「うん」

ピノが一年生のころに毎日使っていた上履き入れに突っ込んで、ぶらぶら提げてきた。昔のピノ

の靴よりも、この赤い長靴は少しサイズが大きいので、はみ出している。

「エリンも確か、長靴が出てきたよね」

「そうよ」彼女は遠い目をした。「残念ながら、あたしの場合はハズレだったけどね」  
にっこり笑って、「ピノは当たり前だといいわね」

ピノにはそうは思えない。「当たると、面倒なことに巻き込まれんじゃないの?」

「あらやダ、男の子がそんな覇気のないことでどうするのよ」

ピノは上履き入れ（からはみ出した長靴）をぶらぶらさせながら階段をのぼり、二階へ上がった。  
鑑定課はフロアのいちばん奥だ。壁の案内図によれば、トイレのすぐ隣である。

ピノが奥へ進んでゆくと、同級生の男の子が一人、こっちにやって来た。彼の名は――  
（NPCの名前は自由につけることができます。以下省略）

「お、ピノ」と、ロンブは言った。「そっか、おれたち誕生日が同じだったんだよな」

フネ村の小学校に、六年生は四十人いる。人口の割には子供の数が多いいのは、この村が住みやすいところである証拠だ（ピノみたいに一人っ子の家庭は珍しい。ロンブの家は兄弟姉妹合わせて八人いる）。

で、ひとつのグループを構成する人間が四十人もいると、そのなかに同じ誕生日の人が居合わせる確率は、漠然と想像するより意外に大きいものだ。

「ロンブ、どうだった?」

「ハズレ」と、ロンブは笑った。「うちじゃ兄ちゃん姉ちゃんたちもみんなハズレばつかったか

らね。予想はついてたけど」

ロンブは優等生なので、ピノには若干、意外に思えた。と同時にホッとした。ロンブでもハズレなら、オレなんかまるつきり場外じゃない? と思ったのだ。この場合は〈ちがひ場外〉が正しいのだが。

「おまえの長靴、赤いね」

ロンブは目ざとく見つけて言った。なぜかしら目がぴかりと輝いた。

「おまえのは?」

ロンブは背中にしよったリュックサックを持ち上げてみせた。「真っ黒だった」

「色には意味があるんだっけ?」

「何だピノ、知らないの?」

知ってたかもしれないけど、忘れた。

「赤い方がいいんだぜ。だって赤い長靴は、もしも当たりの場合には、おまえの相方が女の子だつていうし、いいだからね」

そっかそうなのか女の子かというだけで、ピノの目もぴかりと輝いた。十二歳にもなると、男はみんなこんなもんだ。

「ま、ちよつと行ってくる」

「ンじゃ、あとでね」

鑑定課は、トイレの横のちよつとしたスペースに机がひとつ据えてあり、そこにおっさんが一人座っているだけだった。執務室でも事務室でもない。通りつ端はたの手相見のレベルである。

だがしかし、ひとつだけ奇妙なことがあった。ピノはこのおっさんの顔を知らないのだ。これまで会ったことがない。もちろん名前もわからない。

「はい次の方、受付票を出して」

ピノはおっさんに受付票を渡した。そこには「3」と書かれている。ロンプとピノのほかにも、少なくともあと一人、今日が誕生日の十二歳がいるということだ。

おっさんは特徴たつぷりの角刈り頭だ。よく見ると、顔の皺とか髪の毛の量から推して、おっさんとじいさんの中間の微妙なポイントにいる年代である。

「名前はピノだね」

おっさんは手元の書類をめくって確認した。「長靴を見せて」

ピノが上履き入れごと差し出すと、おっさんは赤いゴム長靴を取り出して机の上に載せ、よっこらしよと声をかけて、足元から何かを持ち上げた。長い柄のついた、おっさんの顔と同じぐらいのサイズの虫眼鏡だ。でかいだけでなくレンズが分厚く、やたら重そうだった。

「おっとっと」

案の定、おっさんは虫眼鏡をゴム長靴の上に落っこした。

「この扱いが難しくてね。君、ちよつと手伝いなさい」

二人がかりで虫眼鏡を持ち上げ、おっさんは両手で何とかかんとかそれを構えた。

「じゃ、今度は長靴を持って、靴底を私の方に向けて見せて」

ピノは左右の手をそれぞれ長靴に突っ込むと、そのまま万歳した。おっさんの顔（と虫眼鏡のレ

ンズ）に、靴底を突きつける。

「おお！」と、おっさんは声をあげた。「これはこれは」

当たり前だ！ というおっさんの叫び声と同時に、ピノの足元の床が抜けた。

ピノは落ちてゆく。

最初は、異次元へワープしてるのかな———と思っただけれど、どうやら違うらしい。落ち始めのときは、トイレの配管や一階の事務室の様子や、役場の床下に住み着いている村でただ一人のホームレスのおばさんの顔まで見えたから、これは物理的落下現象なのだろう。ピノがそれらの物質をどうやって通り抜けているのかという理屈はさておき、だ。

建物と地面を通過してしまうと、あたりは薄暗くなった。何かよくわからない文字みたいなものが、たくさん———ちょうど地層のように積み重なっているのが見える。ピノはそのなかを落ちてゆく。頭の上に、脚を伸ばして、床の上に座っているような格好のまま、小走りぐらいのスピードで落ちてゆく。

あんまり怖いと感じなかったので、手を伸ばしてまわりの様子を探ってみた。指先はすべすべした壁に触れた。

試みに、その壁に爪を立ててみて、たちまち後悔した。

———歯が浮く！

ピノは、積み重なった文字の地層を突き抜ける、細いガラス管のなかを落ちていっているらしい。だっ

て、爪で引つ搔くとあんな音が出るものといったらガラス以外にない。

手を動かしてみても初めて気づいた。頭の上に、あの赤いゴム長靴が載っている。身体をよじると脚の上に落ちてきた。ピノはそれを両手で抱えて、風に髪を乱しながら悠々とまわりを見回していた。

突然、終点が来た。

ピノはお尻で地面に着地した。そこは確かに土の地面だった。かなり長いこと落ちてきたのに、教室の椅子から床の上に落ちたぐらいの感じだった。

はずみで、赤いゴム長靴も地面に転がり落ちた。それは自力でしゅたつと起き直ると、まだ座り込んでいるピノの脇をすり抜けて、駆け出した。

「わ！ 何だよおまえ、ちよつと待て！」

赤いゴム長靴はスキップしながら遠ざかってゆく。ピノはあわてて追いかけた。

土を掘ったトンネルみたいな場所だ。今度は壁に触れると土の感触がある。ガラスじゃない。爪を立てるとぼろぼろ崩れる。天井は高く、おかげでピノは屈まずに走ることができた。「待てたら、おい！ ゴム長！」

必死で走るピノを振り切ろうとするみたいに、赤いゴム長靴は大ジャンプした。つられて、ピノもジャンプした。

で、また落下した。

今度はどこからどう見ても物理的現実的な落下だった。庇から飛び降りたぐらいの感じだ。それ

なりの衝撃が――

あるはずなのだが、何か柔らかいものの上に落ちた。

そのへ何か柔らかいものゝが、この世のものとは思えないような声で唸ったので、ピノは跳ね起きて飛び退いた。

人が倒れている。ぺっちゃんこに俯せになっている。ピノと同じぐらいの体格で、ピノと同じように(そしてフネ村の大部分の村人と同じように)ぶかぶかのズボンにゆったりした筒袖の丸首シャツを着て、ブーツを履いていた。

「いったい」

地面に手をつけて起き上がった。顔が土まみれだ。ただのヒトではない。コドモだ。歳はピノと同じくらいだろう。但し、明らかにピノとは違うところがある。

女の子だ。顎の先ぐらいまでの長さの髪をツインテールにして、先つちよにリボンをつけている。ロングヘアじゃないから、ツインテールにはかなり無理があり、それをさらに無理矢理三つ編みにしているものだから、ぴょこんと跳ねてしまっている。

「痛いじゃない！」

声がデカい。ついでに言う顔もデカい。お月様のような丸顔だ(この世界にも月があります・作者註)。赤ペンでぐるぐるすると丸を描きなくなるようなまん丸のほっぺだ。

「おまえ、誰？」

腰を抜かしたまま女の子に指を突きつけて、ピノは訊いた。



「あんたこそ誰よ！」

女の子は強気に言い返してきた。顔に合わせてこれまたでっかい目が怒っている。でも、あんまり怖く見えないのはナゼだろう。

——何となく、オレと似てる？

ピノの顔はこんなに丸くはないが。

そのとき気がついた。あの赤いゴム長だ。女の子の後ろに隠れている。爪先が見える。覗き込むと、赤いゴム長はもう一足の黒いゴム長に寄り添っていた。

女の子も気がついたらしい。目をトンガらせるのをやめて、首をかしげた。

「さっき飛び降りてきたこの赤いゴム長、あんたの？」

ピノも問い返した。「その黒いゴム長、おまえのか？」

互いに返事をしないまま、二人は同時に二足のゴム長に目をやった。何が怖ろしいのか、ゴム長たちは震え上がってひしと抱き合った——ように、心象風景としては見えた。

突然、ピノたちのいる場所が明るくなった。光源は頭の上ではなく、地面である。いつの間にか二人と二足は、三重、四重になってクルクル回りながら光り輝く輪っかの内側にいた。地面から輪っかが浮かび上がったのだ。  
ぼん。

のどかな音がして、その輪っかのてっぺんに、植木鉢がひとつ出現した。

植木鉢である。ピノの掌に、充分載せられるくらいのおおききである。そこには花がひとつ咲いて

いた。花——だと思ふ、たぶん。花以外のものには見えないから。

ただ、極めてぞんざいな存在だった。ピノよりもっと小さな子供が、お絵かきで描くような花なのだ。黄色い花びらが五つ輪になって、真ん中のヒマワリのタネみたいな茶色くて丸い部分を囲んでいる。茎は真っ直ぐで、根元から一對の葉が生えている。

「お揃いですね」と、その花は言った。

ピノはまた飛び上がってしまったけれど、女の子はあわてず騒がず、地面に正座したまんま膝でずっていつて植木鉢に近づき、後ろ手でピノを指さしながら、

「ね、この子ですか」といた。

「サヨでございます」と植木鉢の花は答えた。

ピノは思わず、自分の指で自分の鼻の頭をさした。「オレはサヨじゃなくて、ピノって名前なんだけど」

植木鉢の花は、きつとピノの方を向いた。

「左様でございますと申したのです」

「あ、そう」

納得してから、驚いた。この花、しゃべった？

「これ何だ？ 花の化け物か？」

ピノは女の子の背中に隠れた。あわあわと彼女につかまっているうちに、震える手でツイインターを引っ張ってしまった。



「痛いってば！」

女の子は邪険にピノを振り払うと、白い目でこつちを見た。

「だ、だってあの花」

「そんなに怖がらなくなたって、化け物なんかじゃないよ。花だもん」

「花はフツー、しゃべらないと思うけど」

「フツウの花じゃないから。ね？」

女の子は首をひねって植木鉢を振り返り、花にうなずきかけた。花はうなずき返して、こう言った。「わたくしは〈世界のトリセツ〉と申します。以後、お見知りおきを」

「ね？」

女の子は今度はピノにうなずきかけた。ピノも不得要領のままうなずき返した。

「〈トリセツ〉の支店が何でこんなところにあるのか知らないけど……」

女の子の滑らかな眉間に皺が寄った。「あんた、何言ってるの？」

「だって〈トリセツ〉だろ。チェーン店の焼鳥屋。うちの村にも一軒あるよ」

その店名なら〈世界の鳥せつ〉である。発音も微妙に違う。

「違う！ このトリセツは、〈取扱説明書〉の略なんだから」

大声で言い返し、女の子は急に怒り顔を引っ込めて、げんなりとため息をついた。

「ねえ、ホントにホントにこれがあたしの相方なの？」

「間違いなく」と、〈世界のトリセツ〉は答えた。

「返品交換は受け付けてくれないの？」

「人生は返品も交換もできないのですよ、ピピさん」

「ピピ」？

「おまえの名前、ピピっていうの？」

「うん」

「どっから来たの？」

「フネ村」

嘘だ。

「オレはおまえの顔なんか知らないぞ」

「昨日、引越してきたばかりだもん」

それなら、知らなくても不思議はないか。

「村はずれの牧場。前はアモウさんて人が住んでた」

「ああ、アモウのおっさんとか」

王都に住んでる娘さん夫婦と同居することになって、牧場を売りに出したのだ。狭い村のことだから、そういう噂はすぐ耳に入る。でも買い手がついたことは知らなかった。

「おじいちゃんとおばあちゃんが、あそこは牧場よりトウモロコシ畑に向いてるって」

「おまえ、じいちゃんばあちゃんと暮らしてるの？」

「そうよ。お父さんお母さんとは、赤ちゃんのころに生き別れちゃったの。でも、フネ村で会えるっ

て聞いてただけで……」

両親と対面するより先に、枕元に黒いゴム長靴が出現してしまったというわけだ。

「ハイ、ハイ、ハイ」

一対の葉をぺしぺしと打ち鳴らし、世界のトリセツが二人に注目を促した。

「自己紹介が済んだところで、わたくしの話をお聞きください」

ピノは右手をあげた。「それより先に質問があります」

「何でしょう」

「トリセツが本当に取扱説明書の意味なら、もうちょっとそれらしい姿で現れたらどうかと思うんですけど。説明書なんだからさ」

「そうね。『アルティマニア』ほど分厚くなくてもいいけど」と、ピピが言った。

「何だ、それ？」

ピピはハツとしたようになってまばたきをした。「今あたし、何か言った？」

「言った。『アニマルマニア』って」

違います。

「あたしね、時々こういうことがあるみたいなの。気にしないでね」

いいや、気になる。

「ハイはい」と、世界のトリセツが割り込んだ。「その件も、わたくしの話を聞けば納得がいきますよ。ともかくお静まりなさい」

赤黒二足のゴム長が、並んでトコトコと前に出てきて、世界のトリセツの前にちんまりと整列した。

「ほら、このように」

ピノとピピも、とりあえずはゴム長たちと同じように座ることにした。

「まずピノさんの質問にお答えしますとね」

トリセツは葉っぱを斜な角度に傾けて科をつくった。

「わたくしのこの姿は、仮初めのものなのですよ。真の姿はまだお見せできません」

「だけど、何で植木鉢なの？」

「植木鉢というのは、ひとつの完成した世界なのですよ」

小さくてもそこに土地があり生きものがいて自給自足しているから、という。

「ですから、〈世界の取扱説明書〉にふさわしい、象徴的な姿なのです。半端な書物などよりもずっとね」

「でも、雨が降らなかつたら枯れちゃうでしょ？」

「如雨露で水をかけないと枯れるよな？」

二人同時に突っ込んだので、声がかぶった。

世界のトリセツの頭（花の部分）が、ちよつとうつむいた。

「ひとつの完成した世界っていうのは、つまり閉鎖系ってことだろ？ そこにはエントロピーの法則が——」

得々と続けようとしたピノの口の端に、何か鋭いものが飛んできて突き刺さった。  
「痛い！」

世界のトリセツは片方の葉っぱの先つちよをふっと吹いた。そう、ガンマンが銃口から漂う硝煙を吹き飛ばすように。

「あんまりうるさいと、お仕置きですよ」

こいつ、葉に棘トゲを隠し持っているらしい。

「あなた、ちゃんと顔があるのね」

ピピは感心している。確かにトリセツの花の真ん中の、さっきまではぞんざいな上にもぞんざいに、ただ茶色に塗りつぶされていただけの部分に、目と口が浮かんでいる。

「眼鏡もかけられます」

どこからかインテリ眼鏡が現れて、トリセツの目の上に乗った。

「わあ、面白い」

「面白くない！」

「面白いよ。それに眼鏡があった方が物知りっぽく見えていいじゃない」

ピピは一人でわくわくしている。

「何でもいけど」ピノは口の端に突き刺さった棘を引っこ抜いた。けっこう長くて鋭い。世界のトリセツは、見かけより凶暴だ。

「説明するなら早くしろよ」

トリセツがまた葉っぱを構えた。今度はピノの鼻の頭を狙っている。

「は、早めにひとつ、お願いします」

「お二人は、ロフラン西大陸や昔の大戦争や魔法石がどうのこうのという件くだりは、もうご存じですね？」

「さっき作者が説明してたからな」

「うん。それであたし思ったんだけど」

ピノは先回りした。「あ、オレも思った！ とりあえずまわりは海ですって、ありやウソだな。作者もまだ考えてないんだ。そもそもこのシリーズが続くかどうかともわかんないんだから、そんな先のことなんか」

ピピは大きな目でじいっとピノを見た。

「あしたが、思ったのは、そういうことじゃありません」

あ、そう。

「何を思った？」

「モルブディア王国って——」

「ん？」

「どってつけたような名前だね  
しいん。」

「まあ、さ」ピノは頭を掻いた。「何かつけないとまずかったです」

そうです。A国とかB国というわけにはいかないんです。

「さすがにお二人は〈選ばれし者〉ですね。良いところに気がつきましたか？ これ褒められるようなことですか。」

「それでは、十二歳の誕生日の朝、枕元にゴム長靴が出現した子供たちについては、どのように聞かされてきましたか？」

（そこはまだ作者も書いてない部分ですが）ピノとピピは口々に答えた。

「この世界には、もういつペン神様に会って、神様と交渉して」

「新しい魔法石をもらってくる資格のある〈選ばれし者〉がいるんだけど」

「その〈選ばれし者〉のもとには、十二歳の誕生日の朝に、ゴム長靴が出現するの」

「だけどゴム長が現れただけじゃ足りない」

「そうそう。〈選ばれし者〉は、必ず二人ひと組になるはずなので——」

「相方が必要なんだ」

「ね？ で、鑑定課のおじさんが長靴の底を鑑定して、そこに相方の名前が読み取れる場合は〈当たり〉で、読み取れない場合は〈ハズレ〉なの」

「つまり、オレの枕元に現れたゴム長は相方のもので、オレのゴム長は相方のところに現れているはずなんだ」

よくできましたと、世界のトリセツは一对の葉っぱで拍手した。

「ですからお二人は、それぞれお互いのゴム長をここに持ってきたわけです」

ピノにはピピが持ってきた黒いゴム長。ピピには、ピノの枕元に現れた赤いゴム長。

「それであたし、思ったんだけど」

今度は何だ。

「①どうして〈選ばれし者〉は必ず二人ひと組なの？」

トリセツが答えた。「神様の元へ行くのは難事ですよ。一人じゃ大変です。二人で助け合って行った方がいいでしょう？ 旅の仲間が必要でしょう？」

「②どうしてキーアイテムがゴム長なの？」

「丈夫だからですよ。どこにでも行けるでしょう」

トレッキングシューズの方がよかったような気もします。

「やっぱり、①も②もどってつけたみたいな感じね」

「おっしゃるとおり、とってつけたような設定なのです」

世界のトリセツはきっぱり言った。

「設定なんてものは、とりあえず〈ついてりゃいい〉のでございます」

再び、しん。

「それでも、お二人がこれからこの世界を冒険する旅に出なければならぬことだけは、真実です」

最初からあるかどうか怪しかったピノのやる気は、今や急速に失せている。

「神様に会って、追加の魔法石をもらうために？」

「いいえ」

トリセツはどこまでもきつぱりしているのだった。

「じゃ、あたしたちは何のために旅に出るの？」

作者のためじゃありませんよ。

「この世界の成り立ちを変えて、この世界を本物の世界にするためです」

ピノとピビは顔を見合わせた。

「本物の世界？」

「じゃ、今のおしたちの世界は本物じゃないのかよ」

「はい、そのとおり」

「二セモノの世界だっというの？」

「二セモノというより——」

できそこないの世界だと、トリセツは言った。不完全なのだ。

「でも世界って、みんな不完全なんじゃないの？」

「そうだよ。完全な世界を求めようとすると、えらいことになるんだよ」

「けっこう深遠なことを言った二人の子供を、トリセツは無視した。

「それより、お二人に大事なことを申し上げるのを忘れていました」

葉っぱの先でインテリ眼鏡の縁をちよつと押し上げて、

「十二歳といったら、お年頃への入口みたいなお年頃でございしますが、これからお二人が二人だけで旅をしてゆく上で、そういう意味でキケンなことやアブナいことは何もございませんで、ご安

心を」

ピノとピビはまた顔を見合わせて、今度は同時に目をそらした。

「ど、どうして？」

「あなた方、双子ですから」

ええええええ〜！

だからちよつと顔が似ていたのだ。でも、

「そんなこと、こんなどアタマで言っちゃっていいの？」

「そうだよ、『スター・ウオーズ』だって、それをバラすまでにはけっこうな手間隙てまひまかけたのに」

するとピビが笑った。「でもあたしは『帝国の逆襲』のときに見当ついていたよ。みんなそうじゃない？」

ピノは固まった。「おまえ、またヘンなこと言ったぞ」

「先に言ったのはピノだよ」

「それも〈選ばれし者〉の素質なのですよ」と、トリセツが言った。「自分が知らないはずの本物の世界のことを、なぜか口にすることができる。神子みこ体質なのです」

体質と言われては仕方がない。

「まあ、いいや」ピノはまた髪を掻きむしる。「オレとピビと、どっちが兄貴なんだよ」

「あたしは女の子だよ！」

「ピビさんが姉さんです」

「ピピは反<sup>ネ</sup>つくり返った。「これからは姉さんの言うことをよく聞くんですよ、弟」

「ていうか、オレたちが双子なら、どうして今まで別れ別れになってたんだ？」

「その方が、こうして巡り合ったとき盛り上がるからです」

（もう少し上等な理由がありますが、それはおいおい書きます・作者註）

ピピがびよんと立ち上がった。「あたしの長靴、履いてみようつと。赤いの可愛い」

ピノも自分の黒いゴム長を引き寄せて、途端にうつと顔をしかめて手で鼻を押さえた。

「これ、臭<sup>くさ</sup>くねえ？」

「ごめんね」ピピが薄ら笑いをした。「今朝ねえ、おじいちゃんがちょっと履いてみたんだよ」

ジジイの足の加齢臭か！

「自分のおじいちゃんの足の臭いだよ。そんな顔したらバチが当たるよ」

そうなのだ。ピピを育てた彼女のじいちゃんばあちゃんは、ピノのじいちゃんばあちゃんでもあるのである。

長靴は、それぞれの足にぴったりと合った。蒸れないし、履き心地も抜群である。二人はぐるぐる光りながら回る（ずうつと回っていました）輪っかの内側を、靴底を鳴らしながら歩き回った。

「それを履いていると、こので、き、そ、こ、ない、の世界の真実が見えてきます」と、トリセツが言った。

「お二人ができるだけたくさんの真実を探し出すことが、この世界を本物の世界に創り変えるために必要なのです」

重々しい託宣のような言葉が終わるや否や、この空間全体が鳴動を始め、二人の足の下から地鳴

りが響いてきた。

「おや、もう変化が始まったようです」

外へ出てみましょうと、トリセツは葉っぱの先で頭上を指した。

「参りましょう。これからお二人が旅する我らができそこないの世界——〈ポツコニアン〉へ！」